



# Hyo-Ryu

2018

主催 Presented by  
**DA・M**

## ごあいさつにかえて

DA・Mの舞台は、多くは台本やテキストを持たずに、いつも小さなアイデアやおぼろげなイメージから出発する。が、今回はひとつの本(後記)から始まった。

——南洋の海でフィリピン漁師8人とともに38日間海をさまよい奇跡の生還(1994年)をとげたものの、その8年後再び出漁したまま行方不明になった、という沖縄・伊良部島漁師の実話である。何故、死ぬほどの過酷な経験をしたにもかかわらず漁師は再び海に向かったのか？ そのまま陸で平穩無事に暮らしていけたはずなのに。そして漁師の妻は、きっとどこかで生きているだろうと夫を待ちつづけている。著者は、彼の足跡を沖縄から南洋まで追いながら、われわれが住む陸の生活とは異なる死生観、土地と海に育まれた“海洋民の精神風土”を見出していく。

——本に記された言葉の数々や個々の“漂流”のイメージを抜き出し、DA・M初参加のメンバーも含めた出演者5人とスタッフとともに、身体・モノ・言葉(声)・空間で試行錯誤しながら辿りついたのがこの日の舞台だ。今、思うのは、漂流とは、自己を繋ぎとめるところがなく、そして推進力を失い他動的な力に翻弄されるままだとしたら、この不確実性の社会にあって、われわれは何を“心の推進力”にして進もうとしているのか？ 幸福、金、理想、愛、正義、使命感、信仰？ だがこうした欲望や望みが、一方でこの地球上の誰かの土地を篡奪し、彼らの心の推進力を奪っているとすれば、東の海の遥か彼方の“ニライカナイ(他界)”へと消えていった漁師の漂流に、魅かれるのだ。

本日はご来場ありがとうございました。ごゆるりとご観劇ください。

大橋 宏

## 漂流について、2、3の事。原田拓巳

一昨年のある日、ラジオから「漂流」の著者、角幡唯介さんの声で本の紹介が聞こえてきた。本の内容は深く印象に残り、海の漂流の過酷さとは程遠く生きているが、心に共振した話だった。

浮かび上がる事の一つは、記憶の話である。漂流者はおそらく、陸の記憶を希望として抱え、そして捜索打ち切り後には、陸にとって記憶の人になっていく。

沖縄の海に行くと記憶の欠片が見えてくる。断崖から飛び降りた少女たちの幻影、神々が海を渡ってくる道、豊穡な生命の太古からの連鎖。沖縄の人で泳げない人は多いと聞く。海はレジャーの場所ではなく、信仰・生活の一部なのだろう。

いくつもの忘れられた記憶がまだ海の底で波に揉まれて回転し続けているのだろうか。

次に、大海原と見わたすばかりの水平線だ。遠洋漁業で生計を立てる漁師は、時に何週間も海上で操業生活する。

人間の手には負えない、時には横暴な自然の中で生の持続を前提に働く者達には、陸の社会規範や価値観に沿うことは息苦しく感じるのだろうか？

8年後、また海に還っていく時間の中で消息不明になっていく「漂流」の光景に心を揺さぶられる。

もう一つ、大都会の混沌のなかで生を継続するのはなかなか難しい。何かしがみついた物があったり、ゆらゆらと流されていたり、ひたすら泳ぎ続けていたり。

きっと漂流している者は何処かにいるだろう。消息不明になった者もいただろう。

それがどんな人で、何処にいるかはわからない。たった今起きていることだから。

付録で付け加える。「Hyo-Ryu」のために、去年夏宮古島に取材してきた。

13世紀に那智勝浦から流れ着いた補陀落僧を始祖といわれがある、池間民族の文化に出会った。僧が最初に居を定めた、ウハルズ御獄(うたき)は鬱蒼とした小高い丘にあり、部落の許可なく入れない神聖な場所である。神々を迎え、畏れる風土がまだそこにはぎりぎりあった。そして絶滅していく危機もそこに見えた。

## 出演者より (順不同)

## 中島彰宏 Akihiro Nakajima

2000年劇団DA・Mに入団。以来国内外の公演に参加。アジア・ミーツ・アジアでの共同作業も継続。ここ数年釜山の劇団“SHIIM”との交流を深める。他、ソロ公演、美術・映像アーティストとのコラボレーションなど。……深夜1時電車が停まった。帰れない。日高屋でラーメンでも食うか。

## 国枝昌人 Masato Kunieda

2000年ころ踊り始め、ダンスカンパニー Nomade`s 参加。その後、ダンスを中心に色々な舞台に参加。昨年DA・Mに関わり、今回二度目。ダンスコントグループ・撫肩 GUYDANCEメンバー。……I ain't don't know nothin for whatso e'er's sake, so get da hell over. Ya ain't gonna get no nothin of me. Get da fuck out ov ya hypocrite hide house. SEE WHACHA SEE. (俺は知らねえよ、アホ！ネタは何もやらねー。偽善の隠れ家から出てみるよ。自分の目で見てみる)。

## 福田光一 Koichi Fukuda

1982年演劇活動開始～劇作、演出、出演ほか。98年よりih舞台製作所共同主宰。近作に2016・17年プロジェクト・ムー『アンボはつづくよどこまでも』『新・盲人書簡』。17年DA・M『煙がモククの目にしみる』劇中テキスト。現在ムー新作台本準備中(18年7月公演予定)……今回は言葉のみならず、戯作者のノンジャンルな身体もDA・Mの舞台に漂流する。虚実皮膜の花いちもんめ。「客観的偶然」との鬼ごっこ。一瞬ごとのラジカルな冒険だ。

——海民の精神が本作のモチーフの一つ。稽古期間中に偶然、『縄文の思想』(瀬川拓郎)という本を発見。そこには「安定的な社会、自由な競合、富の蓄積」に生きる意味や価値を見出す、定住モードの農耕モノカルチャーないしその極相としての資本主義に対し、それを奴隷制と感じ、「競合という他者への『攻撃』を心底厭わしくおもしろい、離群を夢みる非定住モードの人びとがあり、なぜこれほどまでに生きにくいのか、やりきれない日々を送っているのではないのでしょうか」とある。思わず膝を打ち、今作への思想的エールと感じたのは言うまでもない。

## 仙葉由季 Yuki Senba

ダンサー、振付家、俳優、ヌード・モデル、モデル、作家、パフォーマー、プロデューサーとしてマルチに活動する身体表現者。写真雑誌全盛期には、多くの著名写真家の作品展や写真雑誌、CDジャケットにもモデルとして参加。1991年～2012年は浅草ロック座でトップ・ダンサーとしても活躍。去年はプロジェクト・ムー『新・盲人書簡』 / Asia meets Asia釜山公演にも参加。今回DA・M初参加。

——同じ光り、同じ海、同じ酸素、同じ土、時間だけが別々に流れ、崩壊と構築、想定(内)、想定(外)、未知と無知(気付き)、無知と後悔、後悔と学習、生後の反復、反復の中での調和、調和の先に待つ想定、突然の裏切り、突然の無力、はぐれる、漂う、流れる。ねえ、あなたは、どんなふうに漂流する？

## 原田拓巳 Takumi Harada

1984年舞踏家宇野萬氏に師事。1990年からソロ活動開始。他多様なアーティストとのコラボやダンス公演等に参加。「DA・M」、「開座」、「アジア・ミーツ・アジア」の作業に継続参加。抵抗、清浄、猥雑、暴力など人間の心を揺さぶる事象・感覚を素材に身体表現を作る。……自転車が無くなった。どこにも見つからない。今頃だれかにどこかで乗られているのかな？

狂える太陽。狂える月。恋の女神は大股開きの宝貝。フェニキアの水夫のように。琉球のウミンチュのように。パプア。ソロモン。ミクロネシア。白夜のように明るく常夜(とこよ)。焼酎のコーヒーカー。一瞬のゆめに永遠を知る。思い出の毛遊び(モーアシビー)。面影は切ない。切ない。叫びは沈黙の中にある。生命は死の中にある。存在は無の中にある。そして私はあなたの中に。そしてあなたは私の中に。

——挿入テキスト・漂流日誌(福田光一)より抜粋

本作品に使用された「舞台構成表」と「言葉テキスト」は24日より  
以下劇団HPにてご覧いただけます。<http://da-m.art.coocan.jp/>



**共同構成・出演 Co-composed & Performers** (順不同)

中島彰宏 Akihiro Nakajima  
 国枝昌人 Masato Kunieda  
 仙葉由季 Yuki Senba  
 福田光一 Koichi Fukuda  
 原田拓巳 Takumi Harada

**共同構成・演出 Co-composed & Directed by**

大橋宏 Hiroshi Ohashi

**空間構成・美術 Stage Design**

吉川聡一 Soichi Yoshikawa  
 山崎久美子 Kumiko Yamazaki

**テキスト協力 Co-writer**

福田光一 Koichi Fukuda

**発案 Suggestion**

原田拓巳 Takumi Harada

参考図書：『漂流』角幡唯介著（新潮社）

照明・音響 阿狩屋

宣伝美術 H2Oデザイン

協力 霜村和子／野田貴子／大橋いくみ

記録写真 Miki Noya／中村和夫

感謝 南越谷メンタルクリニック 飯島毅・新生産業（株）



ウハルズ御獄(うたき)

企画・制作 Presented by **DA.M**

<http://da-m.art.coocan.jp/>



**劇団DA・M** 1986年、8年間継続した『早稲田「新」劇場』を母体に設立。1988年より自主運営する<プロト・シアター>を拠点に、ジャンル、国籍の枠を越えたアーティストたちとの実験的な共同創作活動を精力的に展開。既存のドラマツルギーから離れ、“身体的な即興行為の発掘と組織化”による始原性と現代性の融合する独自の舞台地平を開拓。国内外のフェスティバルにも参加。現代のあらゆる“システム”に組み込まれない生の揺らぎを浮かす。また1997年よりアジア現代演劇交流活動<Asia meets Asia>を開始し、アジア各地の舞台人とともにアジアに内在する差別や暴力をテーマにアジア国際共同創作公演を継続している——近年の主な作品『トマトをたべるのをやめたとき』(2002年ハンブルグ・ラオコーンフェスティバル／東京・麻布ディプラッツ)／『Aruku』(1997年仏アヴィニヨンフェスティバル・オフ／2004年キルギス国際演劇祭／2004年インドネシア・アートサミット)／『夜がやってきてブリキの切り屑に映るお前の影をうばうだろう』(2010・2013年プロト・シアター)／『でたらめなわけ／Random Glimpse』(2008・2012年プロト・シアター) 『すべては突然やってくる』(日韓共同創作2016年横浜・BnakART)／『煙がモンクの目にしみる』(2017年横浜・BnakART)

**アジア・ミーツ・アジア<Asia meets Asia>～アジア現代舞台芸術交流(1997～)**



**2018年9月<インド・ツアー>～Tokyo-Bangalore-Delhi-Imphal**

…各都市にて興奮の一夜2作品連続上演——<アジア6都市共同プロジェクト『現代版・千夜一夜 Vol.2』>(2016年:横浜BankART NYK Studio／2017年:釜山・チャガルチ魚市場)に加えて、アジア・ミーツ・アジア初の上演“Aruku/Walking”。——アジア、そこ、ここ、の在り様が、人々の呼吸が、声、異言語が錯綜する。趣向異なる2作品をたずさえてアジア4都市を巡る初インド・ツアー。目下準備中—



**2018年11月<釜山街頭公演11月>釜山裁判所前にて**

2014年から開始されたアジア・ミーツ・アジア韓国・釜山公演。今秋も、当地にて過去2回絶賛・高評価をいただいていたエキサイティング街頭公演第3弾を予定。新作“Aruku/Walking”を釜山裁判所前で行う。一昨年、釜山図書館前の車道に実現した“解放区”を、今年も実現できるのか、揺れる韓国の民衆とともにアルキ続ける。

**賛助会員募集** アジア・ミーツ・アジアは、アジア内陸部を目指しての舞台芸術交流活動を目指します。ご支援・ご声援のほどよろしくお願いたします。(賛助会費等、詳細は下記HPにて)

Asia meets Asia : <http://ama.world.coocan.jp/>

